

筑波山を望む霞ヶ浦駐屯地

陸自駐屯地紹介シリーズ 第52回

何ごとにも人材育成 霞ヶ浦駐屯地

関東補給処、航空学校霞ヶ浦校他

駐屯地シリーズ編纂委員会

はじめに

この記事叙述を兵站・補給の教範に
 拠りたくて、現在の自衛隊運用教範で
 の「兵站」「補給」の定義と章立ては
 如何なるものかと、過去に勤務した部
 隊の創立記念日OB会出席を機会に教
 範の閲覧を申し込んだ。返答は「ノー」
 であった。確かに元自衛官も今は一介
 の市井人であるから秘密保全が当然か
 も知れない。遠い昔の記憶を辿ってみ
 たが、窮して防大時代の教官、大東信
 祐氏陸自57に電話した。明快且つ鮮明
 な記憶の糸口を頂いた。

「人事・兵站は戦力の基盤であり、作
 戦の成否を決するものである」

筆者が現役の頃の兵站教範の「野外
 令Ⅱ部」の一端りから始まった。記
 憶は蘇り兵站に関する思考が回転を始
 めた。初めに思ったのは兵站の重要性
 である。実際に戦場に立った経験のな
 い筆者には身に浸みて実感したことは
 ない。だが「兵站・補給」を深刻に考
 える場面に行き遇ったことがある。

平成18年1月、民間建立慰霊碑調査
 に加わってバブアニューギニアに行っ
 た。ここでは日本軍13万人が投入され、
 作戦放棄後撤退し得たのは僅か1万人
 余、多くの将兵が飢餓ゆえの死であっ
 たという。なにも食べるものが無いま
 ま4千キロに届くオーエンスタンレー山
 脈を彷徨って、漸く平地に出て体力と
 生命力が限界に達していた将兵群の渡
 る川には鱉が襲いかかった。

ある土民部落を訪れた時のこと、小
 さな展示小屋があり、中に3つの頭骨
 が「陳列」されていた。こんなことが
 あつてよいものか、盗んででも日本に
 お連れしたい。体が震えた。もし食糧
 弾薬が続いていたならば、……「兵
 站・補給が続かなくても任務を完遂す
 る心構えを持つべきだ」等と心構えの
 上だけで気負っていた若い頃の不遜さ
 を感じたのである。

現在の自衛隊では兵站・補給は如何
 に活動しているのか。自衛隊でなけれ
 ば為し得なかった幾つかの活動につい
 て補給活動はどのような様相であつた
 のだろうか。今回兵站の焦点補給整備
 業務の中核である補給処が所在する
 霞ヶ浦駐屯地取材を考えたのは、中越
 地震、イラク派遣等に際して筆者が兵
 站到に様々な思いを持っていたからであ
 る。

霞ヶ浦アクセス

上野で常磐線快速電車に乗り約45
 分、荒川沖駅で下車する。

激しい雨の中やむを得ずタクシーを
 利用した。約3km、駐屯地正門前に着
 く。道の両側は自衛隊霞ヶ浦駐屯地で、
 大きな倉庫造りの建物が並んでいる。
 道路の北側に陸上自衛隊関東補給処、
 南側に航空学校霞ヶ浦校他の部隊が駐
 屯しており、滑走路を有する飛行場が
 ある。

道路の北側にある正門に立つて駐屯
 地内を見渡すと幾つもの飛行機格納庫
 大の倉庫建ての建物が立っている。左
 手警衛所奥の最初の建物は庁舎造り、
 屋上に国旗掲揚塔と車寄せがあり一目

で本部庁舎と分かる。正門の反対側に飛行場門があり、約70坪ほど先に管制塔が建っている。筆者が在職中とは比べられない高さであったが限らない懐かしさを感じた。

約束時間に1時間余りも早く着いたため、激しい雨を避けようと管制気象隊にお邪魔した。筆者が立川で方面管制気象隊長を務めた折の隷下部隊であり、現地指導や検査で幾たびか訪れた場所である。全然顔を知らない若い隊員諸官から挨拶を頂きながら心から安らぎを感じたことであつた。

車で補給処玄関まで送って頂くと駐屯地広報班長平良けい子3佐が出迎えておられた。特技は航空機整備とのことである。

副処長表敬

最初は表敬であつた。駐屯地司令を兼ねる関東補給処長寺崎芳治陸将陸自76はご不在で副処長宮本忠明陸将補陸自80に受けて頂くことは事前に連絡されていた。広報班から3階に上がると赤絨毯が敷き詰められた一角がある。挨拶と名刺交換の後、冒頭から用意した質問を切り出すことが何故か軽々しい気がして一瞬の沈黙があり、副処長が口を切つて助けて頂いた。

最初は軍事組織の補給機関が持つ本質的な宿命について触れられた。有事に備えてのストックは多品目に亘り、

この内容は自分たちで苦労して考えなければならぬと語られた。文字に書いてしまえば簡単過ぎる。だが副処長の言葉には深い背景が開示されているのを感じた。例えば対空火網等の大型のシステムは多数の機能、多数の部品から成り立っているが、部品交換などすれば補給が必要な品目から、こ



現場指導中の宮本副処長

品に至るまでストックする必要がある。それらが整理されている保管庫の棚を、更にそのような部品を必要とする第一線部隊の緊急事態に対して一瞬でも早く届けようとする補給系統各段階での真剣な気合いと流れる汗を想像出来る。

戦場様相を交えた想像をしてみよう。策源地で戦火の被害を受け、製造材料も製作手段も破壊されたような場

合も当面の補給を可能にするためには、予め被害を念頭に置いて余裕をもつて分散保管しておくなど、備蓄に頼ることが必要であり、量的にも配置的にも最適を追及しなければならぬ。ここに科学があり人の英智がある。最後の質問はここ数年大東亜戦争史を紐解くたびに抱いた疑問に係るものであつた。

「不遜なることを承知の上で言えば、大東亜戦争の高級統帥は、兵站・補給に関心が薄かつたのではなかつたかと思わざるを得ないのですが、こうならぬための新しい施策はありますか」。この質問に対して思わず身を乗り出す回答が返つてきた。「いろいろな施策が必要と思います。既にその第一歩として幹部高級課程カリキュラムに兵站補給教育に関する時間が加えられました。提唱者は現統合幕僚長折木陸将です。陸上幕僚長であられた頃のことです」。

兵站補給に関する教育は新隊員から中堅幹部に至るまで課程教育、集合教育などがあるが、いづれも職種・特技教育である。高級幹部の補給・兵站専重に関する思想を身につける教育に成り得ていたかどうかは確信が持てなかつた。だが幹部高級課程はいわば高級統帥に携わる将官育成の課程である。その課程での時間数は特技細部に

かかる各論でないことは容易に想像できる。だとすれば兵站補給尊重の思想を植え付ける概論教育ではないのか。嬉しくなったのが筆者の思い過ごしとは言えまい。表敬は単なる挨拶ではなく、兵站・補給について筆者如き市井人にも希望の曙光を見いだせるものであつた。

表敬の後、関東補給処整備計画部企画課鎌田ツタオ事務官から、また整備班長高星勝3佐から霞ヶ浦駐屯地の歴史関東補給処の組織、歴史、過去の活動例について説明を受けた。

霞ヶ浦駐屯地概史

関東補給処の地の歴史は大正10年、海軍航空技術研究所が開設された時点に始まる。大正11年には霞ヶ浦海軍航空隊が創隊、昭和4年ドイツ飛行船ツェッペリン伯号来訪着陸、昭和16年第1海軍航空廠が創立された。昭和20年8月終戦の後第1海軍工廠は米軍に接収され、飛行場は農地として払い下げられた。

昭和28年講和条約発効後武器補給廠が立川から移駐し昭和29年には武器補給処として出発した。昭和34年になる航空学校霞ヶ浦分校が三重県の明野駐屯地から移駐してきた。この頃の首都周辺の飛行場事情は立川に米軍、木更津は航空自衛隊輸送航空団他、宇都宮には海上自衛隊等が所在し、空いて

いるのは霞ヶ浦しかなかったといえるが、海軍航空隊跡地は既に開墾され土地取得には約3年の年月が必要であったと伝えられている。

翌昭和35年には霞ヶ浦駐屯地業務隊が創立された。その後航空自衛隊第1高射群の部隊が首都防空に睨みを効かし、平成10年には陸上自衛隊の総合的な補給体制の改編を受けて関東補給処が発足した。平成14年には航空学校霞ヶ浦分校の名称が航空学校霞ヶ浦校と変更された。同年東部方面隊隷下の第101全般支援隊が新編された。

関東補給処

東部方面総監隷下の機関であり、組織は在霞ヶ浦所在の本処と他駐屯地・分屯地所在の支処・出張所からなっている。リーフレットを基に述べている。



現場視察中の寺崎駐屯地司令

総務部

部長増田恭士1佐の指揮のもと、処の人事・教育訓練・施設の管理・輸送に関することや警備・広報に関する業務を担任している。

務を担任している。

調達會計部

部長中村拓郎1佐。補給品及び整備部品等の調達業務を担任している。

情報処理部

部長内海浩1佐。電子計算機による補給整備業務を円滑に運営するためのシステムの維持管理とユーザーが快適に使用できる環境を担任している。

装備計画部

部長間瀬元康1佐。関東補給処の運営及び後方支援業務の企画統制を担任している。

火器車両部

部長堀井克哉1佐。戦車・火炮・装甲車等の補給・整備及び部品や教材等の製作を担任している。

誘導武器部

部長大井一之2佐。地对空誘導弾、対戦車誘導弾等の整備補給を担任している。

化学部

部長中村勝美2佐。化学器材の調達・補給及び整備等を担任している。

航空部

部長猶迫和弘1佐。航空機及び航空器材の補給整備を担任している。

通信電子部

部長今村健一1佐。通信電子器材の調達・補給及び整備並びにこれらに関する調査研究を担任している。

支処・出張所

付け加えれば補給処改編の時、それまでの通信補給処(大宮)は霞ヶ浦に移駐して関東補給処に統合され、需品補給処(松戸)、施設補給処(古河)、衛生補給処(世田谷区用賀)が駐屯地をそのままにして関東補給処の支処に、燃料支所、弾薬支所も隷下に統合された。隷下部隊が分散することにより処長の指揮に施策が必要になってくるのは当然であり、定期的な支処長等を本処に招致し会議を開く。或いは処長自ら、或いは副処長を派遣して視察、検査、懇談等を実施して企画の徹底を図っているとのことであった。

なお関東補給処の指揮権は東部方面総監にあるが、補給業務については大臣直轄の機関である補給統制本部長の統制を受けることと規定されている。災害派遣時の補給処の活動

大規模な災害が発生して自衛隊が出動した時、被災民に配分する食料等は

一般的に地方自治体が備蓄するものが充当されるが、出動部隊の糧食、燃料等は自衛隊保有のものが充当される。これらは物価高騰を防ぐ見地から被災地又は周辺で取得されることはなく追送である。後方支援連隊等の補給部隊が奮闘する場面となるが、補給処の支援が必要となる。さらに被災地で使用するため全国か

ら差し出された装備品例えば天幕等を差し出し部隊に返すときの苦労は並大抵ではないと聞いた。入り組み品に破損・亡失・所属部隊の記名が消滅したもの等を一々処置してから戻しているが、欠品のまま部隊に返せば部隊の即応態勢を低下させる。大変な苦労と思われる。

これが海外派遣になると更に複雑になる。まず武器等輸出禁止の考え方、例えば整備すればまたなんとか使える装備品等を海外に残し、先々現地の反政府勢力に渡れば一大事であり現地廃棄や寄贈は軽々には行えない。高い経費をかけて持ち帰ることになるが動植物検査の見地から十分な消毒洗浄を行い、輸出入管理の見地から出国時と帰国時の員数は正確に照合されなければならない。海外派遣の準備に時間を要し、帰国後の原態復帰にも時間がかかる所以であるという。

自動倉庫現場の実現

航空部の保管倉庫を見学させて頂いた。飛行場にある格納庫ほどの大きな倉庫である。入り口から入った途端ドラム缶ほどの大きさの頑丈な格納容器に入った部品が並んでいた。奥に進むと屋内なのに更にガラス張りの小屋があり、その外側にベルトコンベアが走り、小屋の中には女性を含む作業服を纏った技官らが自動配分される小型

部品の配分を監視していた。神経の集中が必要な作業である。

航空学校霞ヶ浦校

かつて日本はアメリカの消耗戦略で痛哭の涙を呑んだが海軍と共に陸軍にも世界一流の航空隊があり、優秀な操縦士がいた。敗戦と共に翼を失い、漸く明野で再生したがその翼たるや昔日に比べればオモチャと酷評されかねないものであった。それでもかつての空の男達は当初明野に馳せ参じ、次いで霞ヶ浦に赴任して、災害発生の都度陸幕航空隊や第1ヘリコプター隊の名のもとに当時としては華々しい任務を遂行した。

中でも伊勢湾台風後の災害復旧では今上陛下が皇太子であられたころ初めてV-44にご搭乗になり被災地を視察、ご慰問の行啓があったのである。その頃の操縦士は既に退役されて久しい。個人的記述をお許し頂きたい。筆者が防衛大学校合格の通知を受けた直後近所の富農の跡取りの語る所によれば、帝都防空戦闘でB29に馬乗り攻撃をかけた落下傘降下した「穴吹伍長」に憧れ予科練に志願したがすぐ終戦になつたという。激励の言葉と過分な餞別を貰ったことが思い出されるが、明野が陸上自衛隊航空科の揺籃であるとすれば霞ヶ浦はかつてのエースが隠れ里として腕を撫していた鍛錬場ではな



航空学校霞ヶ浦校

かろうか。今は霞ヶ浦には実働の飛行部隊はなく霞ヶ浦校校長井上和典1佐指揮のもと幹部操縦課程の前期があるのみ、代わりに陸上航空を陰で支える整備教育のメッカとして真剣な教育を実施している。

筆者と職種・特技を同じくすることから自然空域環境の厳しき、人材育成や特技教育の難しさに話が流れた。この空域は成田の飛行経路が上にある上、航空自衛隊百里の空域にも近いことから高度3千フィート以下に抑えられて更に近い将来羽田が広い空域を一元管制する見込みもあり飛行安全上の対策が必要となってくるのとのことである。

また定員削減の影響を受けて第一線はぎりぎりの人数で運営しているため、将来を見越した人材育成のための

人事配置、課程教育への被教育者差し出しが苦しくなっているらしく、人事畑に勤務された折のご苦労や、自隊の不都合を知りつつ大局的判断で差し出された敬服すべき指揮官がいたこと等の話を懐かしく伺った。

東部方面管制気象隊第1派遣隊

立川に本部がある東部方面管制気象隊の隷下部隊で、高橋秀一3佐指揮のもと霞ヶ浦飛行場に於ける飛行場管制業務、気象業務、飛行情報業務を担任する部隊である。対空無線機が装備された管制塔から在空機と通信する他、気象系電気計算機通信システム及び飛行計画書や飛行情報を受受する飛行情報系電気計算機通信システムをもって国内全ての飛行場と接続している。

この部隊に必要な特技の大部分の基本教育は航空自衛隊に依存しており、管制及び飛行管理では航空自衛隊第5術科学校(小牧)、気象では第4術科学校(熊谷)に入校しなければならない。また我が国内においては航空法により管制業務が国土交通大臣の権限と規定されていることから、航空局の業務視察を受けなければならない部隊となっている。

陸上自衛隊が管制業務を開始したのが霞ヶ浦飛行場であり、運輸省や航空自衛隊でさえ米軍の管制を受けていた頃から余り遅れることなく管制業務を

開始した歴史を持つている。

第101全般支援隊

方面隊直轄部隊の後方支援隊の隷下部隊で飯田穰2佐指揮のもと整備補給支援を行う。

霞ヶ浦駐屯地業務隊

山出昇1佐指揮のもと霞ヶ浦駐屯地の施設管理管轄、補給、厚生、衛生業務を担任する部隊である。

駐屯地会計隊、基地通信中隊の部隊がある。

行事と地域との触れ合い

- 駐屯地の行事を挙げてみよう。
 - 1月 駐屯地成人式
 - 5月 駐屯地創立記念行事
 - 8月 駐屯地納涼大会
 - 12月 駐屯地年末もちつき大会
- また部外行事への協力では



東部方面管制気象隊第1派遣隊



8月 駐屯地納涼大会

4月 かすみがうらマラソン
 8月 土浦キララまつり
 10月 土浦全国花火競技大会
 11月 つくばマラソン
 等に協力している。
 霞ヶ浦勤務経験を持ち全国に散った人々に良い思い出として残っているのではなからうか。
先輩とのひととき
 取材に先立ちある先輩会員に電話した。記事執筆の途次、ともすれば投げ出したくなる弱い火を掻き立ててくれ、何よりも知覧取材を強く勧めて、過ぎし時代の若人の殉国の想いと献身に対する鎮魂の心を啓いてくれた先輩である。ご自宅が霞ヶ浦に近いという事で「会おう」という電話を頂いた。

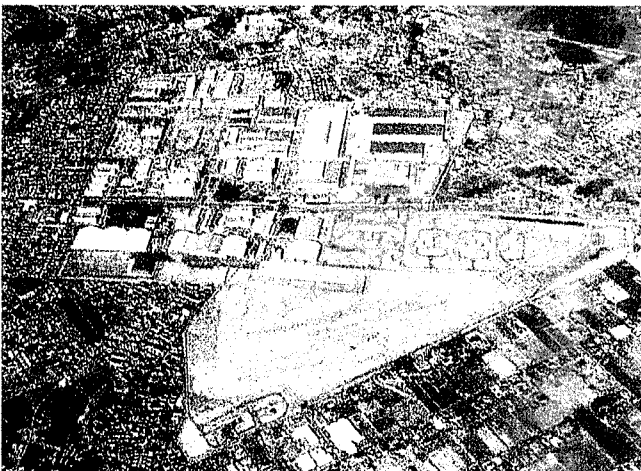
先輩から初期の航空管制業務の様子についてお尋ねし、いろいろお話を頂いたが、自分が在籍した部隊の貢献を長々と書くのは手前味噌に過ぎる。だが自衛隊創設期の先輩がたのご奮闘は他の分野にも敷衍できる話でもあった。改めて草創期の先達のご努力に敬意を捧げたい。いずれ創生期の先輩がたを誌面に披露顕彰する企画も編集委員会に提案したいと思った。
 今回、霞ヶ浦第1ヘリコプター隊時



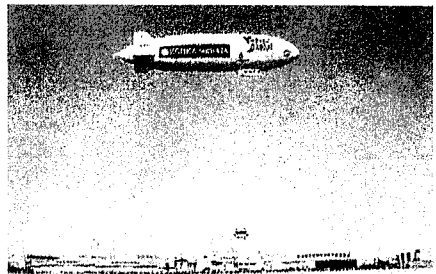
最新ヘリAH-64D

代からのパイロット宮島廣氏
 陸自59にお話を伺った。また筆者が深く畏敬する竹内武司氏陸自62には参考となる考え方を啓示頂いた。霞ヶ浦駐屯地広報班長平良けい子3佐には取材間を通して案内して頂いた。感謝したい。

文責 松村興延陸自64



平成14年の駐屯地



駐屯地飛行場地区を飛行するツェッペリンNT号
 平成17年 76年ぶりに再来